しゃらりん 00
2002/8/1
創刊準備号
大阪教区教化委員会機関誌［沙羅林］

発行に寄せて

真宗大谷派大阪教務所長
比良正士

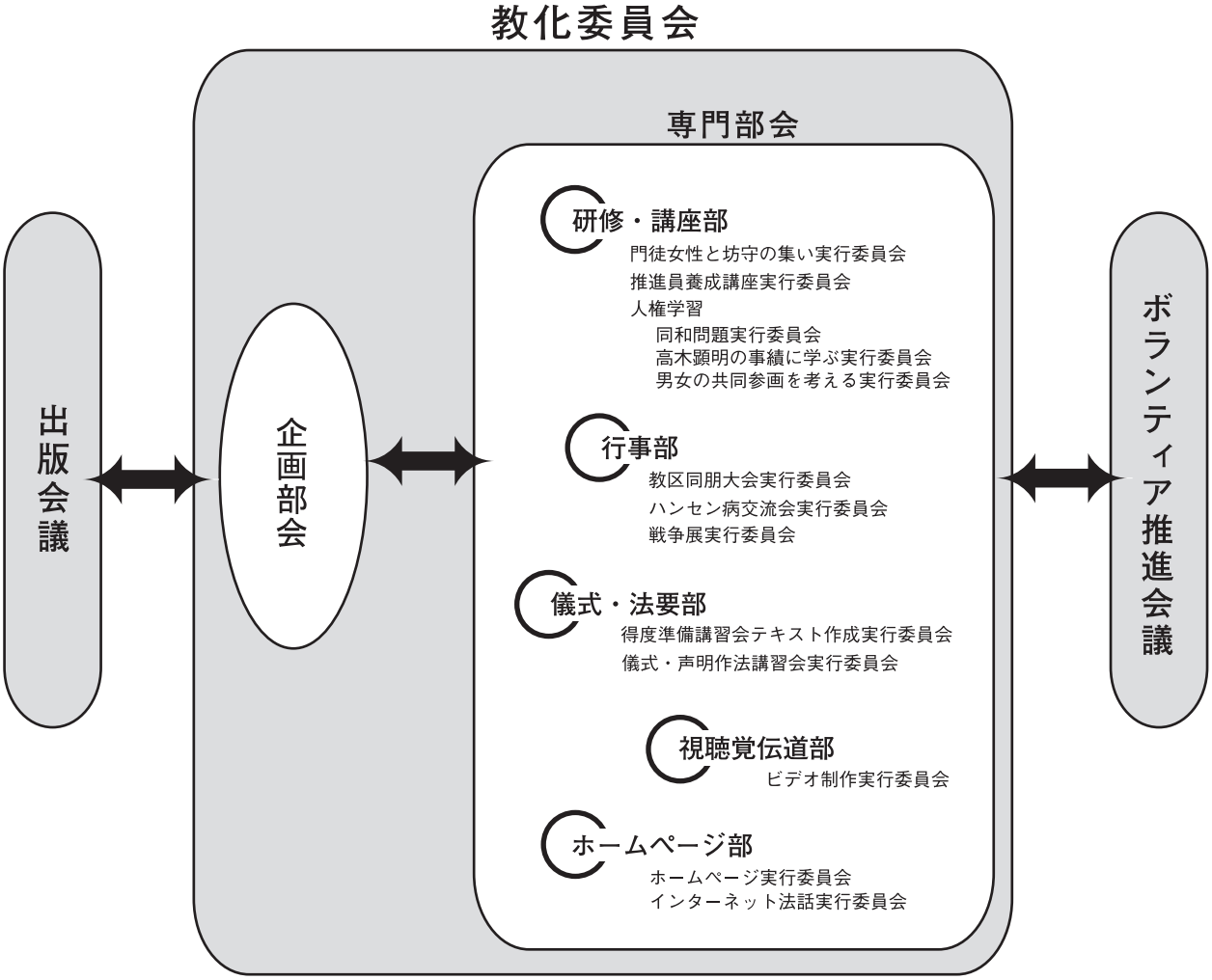
このたび、教区教化委員会活動の紹介と、それに対する意見・感想をひろく聴取することを趣旨として、教務所が発行する機関誌『しゃらりん』準備号を発行いたしました。

これは、教区教化委員会をはじめとする教区教化体制の見直し、そして真宗同朋会運動発足四十周年をお迎えするについて、全国の教区で実施された「真宗同朋会運動推進のための課題抽出作業」などを経るなか、教区の議決機関や教区教化委員会の席上、教区の皆さまに教区教化委員会活動の願いや実施内容を適時にお伝えすることの大切さが唱えられましたし、何よりも教区教化委員長をおあずかりする小職自身が、その必要性を痛感してのことであります。

特に、① 真宗同朋会運動の発足後、多くの研修・講座などが実施され続けてきたにも関わらず、その趣旨や願いが周知されていない ② 寺院をとりまく経済的状況が激変したことにより教化活動に対する熱意の衰えが感じられる ③ 各寺院の教化活動の支えが必要である ④ 教区と各組、各寺院との連携の深まりを促す、などの現状が同課題抽出作業報告にも謳われていることや、宗祖の御遠忌を目睫に控えていることに鑑みますと、こうした事務局の取り組みは遅きに失した観もございます。

しかしながら、例えばご都合により事業実施会場にまでお越しになれない方にも事業の概要をお知らせし、また、各寺の同朋の会や聞法会で記事を取り上げていただくなど、本誌が教区と各寺院との相互関係をより深めることに資し、もってこの困難な現状を少しでも克服することができればと期待するものであります。

最後になりますが、本誌の編集につきましては、二〇〇一年度教区会（通常会）での小職の答弁どおり、暫時、教務所員と小職が依頼した幾人かの教区の方々（別掲のとおり）でこれを行いたく存じます。皆さまにはどうか本誌発行の趣旨をご了解賜り、誌面の充実を含めよろしくご協力のほどお願い申し上げます。



教化委員会規則に定める教化機関

●企画部会

①大阪教区の短・中期的教化課題の抽出（教区テーマ・年度スローガンを含む）を行い、年度の基本教化課題・基本教化施策を立案する。
②専門部会委員の推薦をする。
③各専門部会において、基本教化施策に基づいて検討された教化施策を策定する。
④策定した各教化施策の予算の試算を行う。
⑤専門部会において推薦された実行委員の選任を行う。
（委員は十五人以内、任期は三年、再任は連続して二期を越えない）

●専門部会

①企画部会で設定された基本教化課題・基本教化施策に基づき、具体的事業内容の策定を行い、実施する。
②強化事業について企画部会へ提言をする。
③必要と思われる強化事業に実行委員会を設け、併せて実行委員会委員の推薦をする。
④各実行委員会の進捗状況の把握をする。
（委員は二十人以内、任期は三年、再任は連続して二期を越えない）

●出版会議

教区内の文書伝道を審議・調整し、出版物の発行に取り組む。
（委員は十五人以内、任期は三年、再任は妨げない）

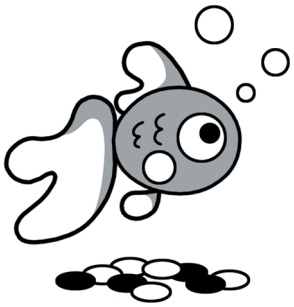
●ボランティア推進会議

教区におけるボランティアに関する事項の審議と推進に取り組む。
（委員は十五人以内、任期は三年、再任は妨げない）

2p
大阪教区教会体制機関図（教化委員会・出版会議・ボランティア推進会議）と各機関の説明を掲載しています。また、専門部会で設けた実行委員会名称も併せて載せております（二〇〇二年度に設けられる実行委員会です）。

3～5p
前年度の教区教化委員会において実施された事業の中から、専門部会の事業の紹介・実行委員会に関わられた感想、実行委員の事業に関する感想等、特に記事の内容を限定せずに、各専門部会の委員さんにご依頼して、掲載しております。

6p
「教区アラカルト」と題して、各組や寺院での教化の取り組みを紹介していく予定です。今回は第十五組の仏教文化講演会を取り上げさせて頂きました。



行事部

ハンセン病交流会 実行委員会に参加して

私が大阪教区主催の実行委員に参加させていただいて、一番の学びは「事実」に会わせていただいたことです。生活の中で「知らないことを知っているかのようにしてしまっていること」が多い私にとって、うやむやにしてはいけない「命の問題」に出会ったことです。「ハンセン病問題」が私たちに何を語りかけ、問うているのか。単に歴史上の一つの出来事ではなく、多くの方が何を願って時代を超え、伝えようとしているのか？　その一コマにでもふれることが出来ました。

私は忘れられない「言葉」と出会いました。邑久光明園を訪れたときのことです。療養所に行けるということで、私なりに色んな資料や本を読みました。どれも皆壮絶な内容でした。国を守る、国民を守るという言葉を使い、個の人権を奪ってきた「歴史」がありました。「権力」の名の下に「人」を人として見なかった「事実」がありました。それらの歴史を全部引き受けてきた方々に会うということは、私にとっては未知の世界です。挨拶すら出来ないんではないだろうかと想っていました。しかし、療養所に行った私は、案内をしてくださる園の方々の明るさに驚きました。座談会の時にその事を質問しました。「私の学んできたハンセン病問題からは、あなた方のような笑顔は浮かんできませんでした。」するとこんな答えが返ってきました。「もう涙は枯れました」。その時は言葉を失いました。色々言ってくださったんですが、その言葉しか耳に残っていません。

光明園・邑久長島大橋

私たちの生活の中で「涙が枯れる」ということがあるでしょうか？比べる必要はありませんが、この問題は単なる「歴史」の問題ではありません。「生死」の問題です。ここに親鸞聖人の教えが、「問題」となって私に問うているんだと思いました。

人権問題に関わる中でどうしても抱かざるを得ない悶々としたものがありました。それは「差別者」になることです。「私の問題」になっていないのに「差別者」の自覚を持ったようになってしまっている自分がいました。しかし冒頭に書きました「知らないことを知ったようにしている私」をうち破る問題が人権問題であり、真に親鸞聖人の教えに出会うことだと思います。

私一人が「命の事実」に出会う場、それが実行委員会の真の目的ではないかと思いました。

ここでこの実行委員会にご縁を頂きました大阪教区に感謝の気持ちと同時に、問いも生まれてきました。スタッフでありながらこういうことを言うのも筋違いかとは思いますが、まず事の進み方に疑問を感じました。事業に対してのスタッフ会が「準備」に費やす時間がほとんどと言うことです。これはスタッフ間に学び（知っている者と知らない者）の差が大きいということです。学習会もあれば尚良いと思いました。それと私の中で一番の問題点は、「案内」（呼びかけ）と「発表」（報告）のバランスが悪いということです。いざ事業を進めるに当たって「案内」（呼びかけ）には力を入れるんですが、「発表」（報告）が極端に少ないということです。これは「学び」ではないと思います。「大阪教区主催」とはいうものの、狭い間だけの学びになると思います。参加しなかった人にも「発表」（報告）する事を続けることが、確実に問題（問い）が伝わっていくことではないかと感じました。

研修・講座部

高木顕明の事績に学ぶ実行委員会

一九九七年に発足した「高木顕明の事績に学ぶプロジェクトチーム」を引き継いでの実行委員会です。

今年度はより広く教区の方々と課題を共有したいとの願いから、行事部の「高木顕明パネル展実行委員会」と合同で、学習会、パネル展、公開講座をもちました。学習会では、真宗ブックレット等の資料を使っての事績と『余が社会主義』を学びました。「知っていますか?高木顕明―大逆事件に連座した念仏者―」のテーマで、同朋大会の折にパネル展を、五月十三日には泉惠機師を迎えて公開講座を開催しました。泉先生は、足と時間をかけて高木師の発掘に尽力されたその熱い思いを語られ、日露戦争当時のきびしい状況の中で、被差別部落の人々と向き合いつつ、念仏者として非戦を唱えられた高木師の真摯な生き方を浮かび上がらせてくださいました。そして、今を生きる私たちの宗門のありようを重く問うものとして響いてきました。

今年度も高木顕明師の命日にちなんで『遠松忌』が、新宮市浄泉寺で六月二十二日に勤められ、多くの方々のご参加をいただきました。

今後も高木顕明師の事績に学び、自らを問うものとして、課題の共有と継続が願われます。

ハンセン病問題に触れて

人権研修会では、昨年と今年と二度にわたってハンセン病問題について学びました。邑久光明園々長の牧野正直さんからは、ハンセン病に対する誤解に対して医師としての立場からの説明を、さらには一九〇七年以来のらい予防法の持っていた問題点、つまり強制的隔離や断種を条件としての療養所内での結婚などについて詳しくお聞きすることができました。同時に今年は光明園入所者の中山秋夫さんからも、発病以来の苦難の歩みを聞かせて頂きました。

二度の研修会の参加者は、共に五十名前後でした。私自身も教化委員のご縁で初めて参加できた問題意識の乏しい人間ですが、お話に初めて触れてみて、一人でも多くの人に、こういうご縁に会ってほしいと願わずにはおれませんでした。

今年五月には、光明園を訪ねての交流会の機会にも恵まれました。一九八八年に架けられたという邑久長島大橋を通って私たちを乗せたワゴン車は、アッという間に長島へ渡っていました。それは逆にその橋が架けられるまでの隔離政策の長さを語りかけているようにも感じられました。初めて自分の足で歩いた療養所の大地、お会いしお話した入所者の方々、それらが私にこれからも語りかけてくるでしょう。

視聴覚伝道部

教化ビデオ制作について

視聴覚伝道部では、同朋の会推進の一助を願い、映像を使った新しい教化教材を作成しています。

『おばあちゃんの本箱』は、アニメーションとまではいきませんが、ストーリーは叙情的に演出し、映像はイラストを紙芝居風に展開する手法をもちいて、現在3本を数えるシリーズとなりました。仏典童話を主に縁側で繰り広げられる、おばあちゃんと孫の亜美ちゃんの会話は、社会の現実問題と仏典童話の投げかける課題が重なり合い、共に自らの問題として向き合うことの出来る作品を目指しました。

と、こう書けば何となくカッコいいですが、創るとなると、これがなかなかどうして、出来上がった台本を何度も委員会で読み直し、書き直し。教学的にはどうだろうとなれば、藤井善隆先生にご講義頂き、イラストの雰囲気や時代背景を丁寧にチェックして、声優さんのイントネーションに気をつけてと、いろいろな作業があります。ですが、自分達で創ったものが声となり、形となった時の感動は忘れがたいものがあります。

また、実写版で舞台劇を行った『シロの聞法見聞録』は「清め塩」というテーマで、ある家族が〝そもそも清め塩ってなんだろう〟という疑問を持つことに始まります。人間には聞こえないシロの声は、迷信に振り回されている私達を遊ぶように導いていくのです。それぞれの俳優さんはオーディションで選ばさせて頂き、シロのぬいぐるみは難波別院さんの協力を得て新調したものを使用。俳優さんの熱心な演技と汗まみれになってシロをかぶっている姿には関心させられました。

「シロの聞法見聞録」より

それぞれのビデオは全寺院に送らせていただき、共に好評を得ているとのこと。2年間の視聴覚事業の中で実行委員どうしの出会いだけでなく、ビデオ製作にあたり、広告代理店や俳優さんとの出会いは、日ごろ私達が忘れがちなことに気づかせていただいたことです。それはまさに、寺側だけが納得し独りよがりで創るのでなく、どの作品もご門徒に「見ていただけるもの」「興味をひくもの」として創るという姿勢を勉強させていただきました。

儀式・法要部

同朋奉讃講習会を終えて

過去、宗門内外の多くの方々から待望され続けながらも、なかなか日の目を見なかった、三帖和讃の「同朋奉讃勤行集」が、蓮如上人五百回御遠忌を勝縁として、正式な宗派の勤行式として制定されました。

この同朋奉讃勤行式は、急速な都市化と核家族化の進む中、全国の真宗門徒の家庭で行われていた、朝夕の正信偈三淘念仏和讃等の唱和という、素晴らしい伝統が失われつつあるという危機感から、宗風の回復を願って制定されたものであります。

今回、教区の取り組みとして同朋奉讃講習会を各組・各別院を会場として、二ヶ年に亘って行って参りました。

僧俗ともに学ぶという目標が達成できたところも有れば、そうでないところも有りましたが、ご参加のみなさんは総じて熱心にご受講いただき、一応の成果が上がったものと確信しております。

しかしながら、同朋唱和の普及と、一番の目標である宗風の回復は、一度や二度の講習会で成し遂げられるとは到底思えません。

今後とも粘り強く継続して、事業展開をしていく必要があると思われます。

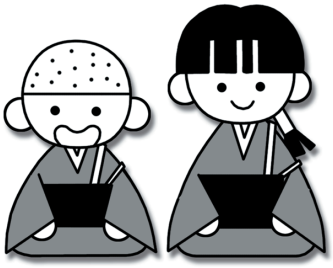
得度準備講習会を終えて

得度式は、真宗大谷派僧侶として、終生聞法生活を送ることを誓う、非常に重要な儀式であります。そういった視点から見ますと、得度準備講習会は例年行われている事業ではありますが、自ずとその願われておるものの深さが知られます。

そこで今年度は、初めての試みとして、受講された方々が、講習会で学ばれたことを再確認することの出来る様な、後々まで用いることの出来るテキストを作成して、講習会に望もうという事となり、年度当初からテキスト作成実行委員会を立ち上げ、慎重審議を重ね、第一版のテキストを作成致しました。

文章や図版として表現していくことの困難さもありましたが、携わられた実行委員・講師の方々にとりましても、有意義な作業であったと思われます。

今年度だけで終わるのでなく、今後版を重ね、より一層充実したものにしていって頂ければと願っています。



ホームページ部

「銀杏通信」について

大阪教区ホームページ「銀杏通信」は開設以来四年、のべ七万人強の人々に訪れていただいています。

今年度も内容の一層の充実を目指すべく活動してきました。具体的には、子どもと保護者のためのページ「銀杏通信キッズ」の立ち上げや、寺院名簿の掲載、高速度回線の普及を見越しての動画配信の実験、独自のコンテンツとしてエッセイのページの作成や「インターネット法話」の準備などです。また、他団体との連携として、大阪教務所のお知らせページの更新のお手伝い、あるいは仏青・谷青・児連の各青少年団体の独自のホームページ作成の技術的な支援、視聴覚伝道部の作られたビデオの公開なども行ってきました。

一方反省点としては、年度初めに計画を立てたようには順調にページを更新していけなかったこと。そして他の部会や実行委員会との連携が充分取れなかったことです。

インターネットという、自由に閲覧でき、自由に情報を発信できる媒体を我々自身が手にしたというのは、世界の歴史上初めてのことです。もちろんまたその様々な弊害も各方面から指摘されているところではあります。

そういった中で大阪教区もホームページを設け、様々な人々に向けて情報を発信していける手段を持ちました。まだ当事者の我々自身、充分活用できているとは思いませんし、いったい誰に向かって話しかけているのか、教区の坊さんなのか、門徒さんなのか、それとも世界中の人々に向けてなのか。そういうことも曖昧なままここまで来てしまったような気がします。皆さまのご意見をお聞きしながら、今一度考えていかなくてはならない時期にきているのかもしれません。それが今後の基本的な課題だと思われます。

パソコン相談室について

広く一般に募集してのパソコン講習会を今年度も行ってきました。しかしながら応募者もだんだん少なくなってきましたし、わずかな時間と大人数での講習ではできることも限られてしまいます。今後はこのような形での講習会は行わなくてもいいのではないか、というのが我々の考えです。

現在、月に二回（第二・第四木曜）午後五時より七時まで、青少年ルームをお借りして「パソコン相談室」を開いています。パソコンに関することはなんでも相談していただける場として、我々としてもこちらの方に力を入れていきたいと思っております。みなさまのご利用をお待ちしております。

銀杏通信●http://www.icho.gr.jp/　パソコン相談室●第２第４木曜５時@青少年ルーム

教区アラカルト

仏教文化講演会

主催・大阪教区第十五組／第十五組門信徒会

今回は、第十五組の仏教文化講演会にお伺いしました。

第十五組は、大阪府の東部、大東市を中心に二十ヶ寺で構成されています。今回で三十一回を迎えたこの会は一九八一年（昭和四十六年）から毎年組の教化事業の総決算として捉えられています。

プログラムは、当初講演会だけであったのが、十年ほど前から、人権啓発映画と講演会の二本立てになり、講演会も人形劇や人権落語を導入されております。

主だった参加者は各寺の役員さん、門信徒会員、推進員、婦人会の方々で、一般の門徒さんは少ないそうです。

今回のこの会は、二〇〇二年五月十八日、大東市民会館にて行われました。人権啓発映画はハンセン病を扱った『見えない壁を越えて』。後半の講演は『本願力にあいぬれば』と題して大谷大学名誉教授・小野蓮明師がお話くださいました。参加者は百名ほどであったそうです。

◆

組長さんにお話をお伺いしました。

しゃら　毎年開催するというのは、大変なことだと思いますが、今この会の持っている課題は、どういうものですか？

組長　参加者の高齢化にともない、世代交代の時期にきていると思います。各寺院においてもそのことが課題になっています。これからも推進員養成講座を実施して、推進員の人たちが中心となってもらいたいと考えています。

それと、伝統があるので寺院側にも安心感があり、そのことも又弊害になっているとも思います。

しゃら　今日の講演の途中で先生が、参加者の方々に「どうですか？」とお尋ねになられた時、「むずかしいなあ」と返事されたご門徒さんがいらっしゃいましたが。

組長　本願力に会うということをきっちり講義して頂いてよかったと思っています。各住職があとでご門徒さん達と話していけるお話、私はこれがいいと思っています。

しゃら　ちょっと気になったのですが、会場内で皆さんが手を合わされ念仏申されていますが、ご本尊が掲かっていないですよね。

組長　会場が市民会館であり、大ホールなので、宗教団体が使う場合はご本尊がかけられないのです。

受付で記念品に布巾を頂きました。広げてみると「光寿無量」と染め抜かれてありました。また、会場内の雰囲気ですが、「とてもやわらかい」という感じがしました。これが伝統ある会の特徴だと思いました。

編集後記

◆「しゃらりん創刊準備号」をお届け致します。教区教化委員会も二期目を迎え、数々の研修会や行事が行われ、また新たなメディアが教化活動を彩っています。企画部会、専門部会、実行委員会、出版・ボランティア推進会議に関わられた前年度の延べ人数は約二百人強と、たくさんの方々に携わって頂きました。◆しかし、たくさんの人々に関わっては頂いているものの、教区の方々から、教化委員会の組織全体が分かりにくく、見えてこないという声を耳にします。教区全体で行わなければならない教化が、たくさんの場があるがゆえに、複雑になってしまっているようにも感じます。出来るだけ分かりやすく、その内容や願いをお届けできればと「しゃらりん」が創刊準備にかかりました。◆また、本誌では、教化委員会を中心に各組や各寺での取り組みなども紹介出来ればと考えています。そのことが「自坊でもこんな行事をしてみよう」というきっかけになればと願い、楽しく活用できる「しゃらりん」の誌面作りを心がけたいと思います。（H）

発行日：2002年8月1日
発行所：真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町 4-1-11
06-6251-4720
発行人：比良正士
編集：　第4組　常榮寺・久世貴子
第12組　清澤寺・澤田　見
第12組　乗雲寺・渡邉延江
第17組　法観寺・廣瀬　俊
第27組　真善寺・松林俊明
イラスト：第27組　願隨寺・平野圭晋
http://www.icho.gr.jp/syararin/